

原発小説を読み直す

—井上光晴『西海原子力発電所』を中心に—

村上 陽子

目次

はじめに

1. 原発小説の系譜

2. 井上光晴『西海原子力発電所』

おわりに

はじめに

2011年3月11日、東日本大震災とそれに伴う津波によってあまりにも多くの命が失われた。また、福島第一原発の事故は収束する気配すらなく、放出され続ける放射能によって数え切れないほどの人々が被曝している。各々の場所において私たちは3.11という日付によってあらわされる出来事を体験し、その出来事によってもたらされた傷とともに生きている。

3.11は、私たちが自らの生や思考のあり方を問い直す大きな転換点となった。しかし、時間が経過するにつれ、3.11にまつわる傷の痛みに対する感覚的な麻痺も生じてきている。私たちはこれまで、多くの出来事によってもたらされた痛みを、同じように麻痺させ、埋没させてきたのではないだろうか。痛みの忘却に抗うように、3.11以後、原爆やチェルノブイリ原発事故、関東大震災や阪神淡路大震災など、数多の出来事の記憶が呼び起こされ、私たちはあらためてそれらの語りに出会い直している。それらの語りは、私たちが知らなかった、あるいは忘却していた問題を想起させ、捉え直すことを要請している。

出来事をめぐる語りとの出会い直しは、文学の場においてもすでに始まっている。3.11以降、川村湊¹や陣

野俊史²らによって、原爆や核にまつわる表象を問い直し、原発に関する表現に向き合おうとする試みがなされてきた。原発に関する表現は、詩、映画、歌、記録、漫画、小説など多岐にわたっているが、本稿では特に原発を主題として扱った小説に着目していきたい。1節では、原発によって生み出される電気を享受してきた日本社会に向けて、小説がどのような可能性や物語を呈示してきたかをたどり直す。2節では、原発を扱った非常に早い時期の作品であり、原爆と原発の問題を重ね合わせた物語構造を有する井上光晴『西海原子力発電所』を取り上げ、出来事の当事者性の問題に着目して論じていく。

1. 原発小説の系譜

ここでは原発が作品の中心に置かれた小説を「原発小説」として取り上げる。ここで紹介できるのはあくまでも管見の限りのものであり、このリストに含まれるべき作品は他にも多くあると思われる。児童文学やミステリー、純文学など、多数のジャンルにまたがるこれらの作品群を「原発小説」として捉え直し、原発をめぐる表象が小説作品においてどのように積み重ねられてきたかを検証することを本節の目的としたい。以下で初出順に内容を紹介していく。

① 野坂昭如『山師の死』（『小説新潮』1977年2月号）

東北の牧草地を買ったものの、開発プランがつぶれて大損をした男と休職中の原子力技師が手を組み、牧草地を売り込む計画を立てる。技師は男に内密で牧草地に放射性質を含んだ

¹ 川村湊『原発と原爆——「核」の戦後精神史』河出書房新社、2011年8月。

² 陣野俊史『世界史の中のフクシマ——ナガサキから世界へ』河出書房新社、2011年12月。

被曝労働者の遺灰を散布し、原発から漏れ出した放射性物質によって牧草が汚染されたように見せかけた。技師自身も被曝しており、この騒動によって原発を止めることを真の目的としていた。技師は男に遺書を託して自殺する。技師の志を知った男は、補償を求めて原発と闘うことを決意するが、牧草地ではすでに証拠隠滅のための大規模な除染が始まっていた。

- ② 井上光晴『プルトニウムの秋』（『潮』1978年11月号）

原発の環境調査を担う系列会社への転出を望む技師とその妻のところに、かつて原発で下請け作業員として働き、体を壊した男が訪れる。男は技師に自分が原発で働いていたことを証明してくれるよう頼むが、技師はそれを断り、男を追い返す。後に『西海原子力発電所』の作中劇として用いられる作品である。

- ③ 野坂昭如『乱離骨灰鬼胎草』（『小説現代』1980年4月号）

古くから差別的な扱いを受け、墓石や遺体の埋葬、売春などを生業としてきた村に原発が作られることになる。補償金と引き替えに漁場を失ってしまった住民は原発の労働者となり、子どもたちまで原発で働く体制が作られる。結末では、大震災の予兆も示されている。

- ④ 水上勉『金槌の話』（『海燕』1982年1月号）

東京で物書きとして働く主人公が若狭の実家での法要を契機に旧友との交友を復活させる。旧友は農閑期に「ゲンバツ」で働いており、東京にいる主人公のもとに時々電話をかけてくる。主人公は、故郷の近況や思い出話の中に混じる原発の影を感じ取っている。

- ⑤ 水上勉『鳥たちの夜』（京都新聞、岩手日報、南日本新聞、山形新聞、徳島新聞、日刊新愛媛、埼玉新聞、上毛新聞、福井新聞、いはらき、奈良新聞、大分合同新聞、日本海新聞、北日本新聞の各紙に1982年1月より280回にわたり連

載）

若狭の中学を定年退職した老教師は、集団就職先を脱走したかつての教え子たちを訪ねる旅に出る。故郷に背を向け、都会で生きる若者の姿が主題だが、原発の土地・若狭に対する都会人のまなざしや地元の人々の思いも重要な背景となっている。

- ⑥ 井上光晴『西海原子力発電所』（『文學界』1986年7・8月号）

次節で取り上げ、論じていくことにする。

- ⑦ 水上勉『故郷』（京都新聞、岩手日報、山形新聞、新潟日報、北日本新聞、福井新聞、岐阜新聞、新日本海新聞、愛媛新聞、徳島新聞、大分合同新聞、南日本新聞の各紙に1987年7月9日～1988年6月28日まで228回にわたり連載）

アメリカで暮らす夫妻が法事のために帰郷するが、妻の故郷は原発の密集地として大きな変化を遂げている。終の住処を決めることを帰郷の一つの目的としていた夫妻は、原発や親戚とのしがらみによって、故郷に家を建てることをあきらめる。

- ⑧ 井上光晴『輸送』（「輸送」、「青い空 黄色い日」、「クレバス」『文學界』1988年3・7・10月号）

『西海原子力発電所』の執筆途中にチェルノブイリ原発事故が起こり、内容を変更したことへの悔恨を動機として執筆された作品。原子炉事故を描くという『西海原子力発電所』の当初の構想を引き継ぎ、使用済み燃料の輸送用キャスクを積んだトレーラーの事故をきっかけに放射能によって汚染されていく町や港の状況が描かれる。

- ⑨ 高村薫『神の火』（書き下ろし、新潮ミステリー倶楽部、1991年。文庫化にあたり全面改稿）

《北》の工作員、CIA、KGB、公安が原発をめぐる諜報戦を展開する中、チェルノブイリで被曝したソ連の青年が死亡する。ソ連のスパイとして日本の原子力研究所に入っていた主人

公がこの青年の遺志を継ぎ、幼なじみと共に原発を襲撃する。

- ⑩ たつみや章『夜の神話』（書き下ろし、講談社、1993年）

原発に勤める父を持つ少年は、引っ越した田舎での生活になじめずにいたが、ツクヨミの神の力で動植物の声を聞く力を得る。原発のトラブルで、兄のように慕っていた父の部下が被曝したことを知った少年は、神々とともに事故の収束に力を尽くす。

- ⑪ 田端展『被爆舞蹈曲』（『梶葉』通巻□、1995年）

昭和天皇の病臥による自粛ムードが広まる中、市政100周年を記念する広島被爆博が企画される。それに伴い、パビリオンに会場した観客と対話できるシステムを備えた亡霊人形＝ロボットの開発が進められる。ロボットには被爆者の証言や記録がインプットされており、動力には超小型の原子力発電機が用いられている。主催側は反核を訴えるために核の科学力を用いるという論理を押し通すが、オープン直前のリハーサルの際、昭和天皇が死んだことを聞かされたロボットが害腹自殺を試み、原子力発電機が壊れて放射能が漏れ出す。

- ⑫ 東野圭吾『天空の蜂』（書き下ろし、講談社、1995年）

遠隔操作が可能な自衛隊の大型ヘリがテロリストによってハイジャックされる。全国の原発を停止させなければ高速増殖炉にヘリを墜落させるというテロリストの要求に、政府は偽装工作で答える。テロは未遂に終わるが、民衆に原発の存在を意識させるというテロリストの狙いは達成される。

- ⑬ 高嶋哲夫『原発クライシス』（『スピーカー原発占拠—』宝島社、1999年。文庫化にあたり改題・改稿）

最先端の技術を駆使した次世代型原発がチ

ェチェンのテロリスト集団に占拠される。技術者や自衛隊の介入によってテロリストは殲滅されるが、原発はいつ爆発するかわからない危険な状態で取り残される。

- ⑭ 勝谷誠彦『ディアスポラ』（『文學界』2001年8月号）

原発事故のために日本列島全体が人の住めぬ土地となり、日本人はディアスポラとなって世界各国に離散する。主人公は「日本人難民状況巡回視察官」という肩書きを持ち、チベットの難民キャンプに滞在している。難民キャンプの日本人少女の妊娠とその母の死、弔いを通して、帰る場所を持たない存在となった人々の姿が描かれる。

- ⑮ 林京子『収穫』（『群像』2002年1月号）

東海村臨界事故の後、作者自身が現場を訪ねた体験を元に書かれた作品。丹精した農地と農作物を放射能によって汚染された老人の目線で描かれている。

- ⑯ 勝谷誠彦『水のゆくえ』（『文學界』2002年6月号）

主人公の青年はダム建設をめぐる住民の間に対立が生じていた村で、家業の酒蔵を継いだ。原発事故が起こり、日本人の多くが海外に逃れる状況の中、地元に残った人々の行く末が描かれる。青年は酒造りを続け、不和が生じていた幼なじみとの関係を回復させはじめるが、数少ない周囲の人間は次第に病に倒れていく。

- ⑰ 笹野頼子『水晶内制度』（『新潮』2003年3月号）

原発の実質的な管理と事故時の責任を負い、日本政府の原発予算を吸い上げた女人国、ウラミズモ。日本から亡命した女性作家が女人国のために、出雲神話を元に日本から独立した女人国の神話を書き綴る。

- ⑱ 真山仁『ベイジン』（『ベイジン』2008年、『週

刊東洋経済』2007年6月9日～2008年5月10日号。単行本化にあたり改題・改稿)

北京オリンピックを控えた中国で、巨大原発の建設が進められる。日本から招聘された技術顧問は安全対策の杜撰さに危機感を募らせるが、原発で発電した電気で光を点灯する開会式のセレモニーを行うために試運転が強行され、大事故が引き起こされる。

①⑨ 川上弘美『神様 2011』(『群像』2011年6月号)

『神様』(1993年)を改稿した作品。元のテクストである『神様』と『神様 2011』を並置し、あとがきを付すという特殊な形式で発表された。熊に誘われて散歩に出る「私」の日常が「あのこと」を境に大きく変化し、放射能に汚染された風景の中にあることが浮かび上がる。

②⑩ 古川日出男『馬たちよ、それでも光は無垢で』(『新潮』2011年7月号)

福島県出身の小説家「私」は、原発事故後、編集者らと4人で福島に入る。しかし「私」たちの車に5人目の乗客があらわれる。「私」のメガノベル『聖家族』の登場人物、「狗塚牛一郎」である。「ここまで一切嘘を交えなかった」文章は、「狗塚牛一郎」の登場によって小説に変容し、現実の時空間と小説の時空間が交錯しはじめる。

②⑪ 高橋源一郎『恋する原発』(『群像』2011年11月号)

震災のチャリティーAVを制作することになった監督が主人公。さまざまな作品のパスティーシュとして成立しており、重層的な構造を持つ。「震災文学論」と題された章では『神様 2011』や『風の谷のナウシカ』が論じられている。

野坂昭如、井上光晴、水上勉はいち早く原発を小説の題材として取り上げた作家であった。彼らがまず着目したのは、原発で働く労働者の被曝の問題であった。『山師の死』や『プルトニウムの秋』、『乱離

骨灰鬼胎草』、『金槌の話』では、原発で働き、身体や精神を蝕まれる人々の姿が描かれていた。

大規模な原発事故や原発を狙ったテロを主題とする作品が登場するのは、1990年代以降である。高村薫、東野圭吾、高嶋哲夫は原発がテロの標的となるという物語を生み出した。高村と高嶋の作品には、チェルノブイリ原発事故が呼び込まれている。作中人物がチェルノブイリでの被曝によって家族を失ったことが、世界一安全だと言われている日本の原発の中を見たい、あるいは破壊して原発がいかに危険なものなのかを世界に知らしめたいという思いにつながり、テロの動機の一つとなっている。原発のトラブルを描いたたつみや章の作品でも、スリーマイル原発事故への言及がある。これらの作品が現実の原発事故と無縁ではなく、それらの出来事を受けて構想されたことを伺うことができる。また、真山仁と田端展³の作品では、主要な登場人物が広島県出身者と設定され、核エネルギーとしての原爆と原発の関連が描かれている。

原発の危機を主題とする小説は、事故が起こった場合に想定される被害に言及しつつ物語を進行させ、事故の直前、あるいは直後に幕を閉じるものがほとんどである。井上光晴『輸送』、勝谷誠彦『水のゆくえ』は、3.11以前に事故の「後」を描くことが試みられた数少ない作品だと言える。しかし、これらの作品でも、事故の「終わり」が描かれることはない。核の被害は後発性の障害や生態濃縮などを不可避免的に伴うものであり、人間の生をはるかに超える歳月にわたって影響を及ぼす。原爆や水爆、原発事故によって生み出された多くの「ヒパクシャ」は、核の被害の未了性を生き続けている。そのため、原発小

³ 田端展は、自身が広島の被爆者であった。『被爆舞踏曲』には17歳で被爆した主人公が「人類の偉大な科学技術力」に感銘を受けたと語る場面があるが、最終的には原発事故が起こり、被爆者自体が中止を余儀なくされるという結末が設けられている。息子の小久保亮は「著者はもともと原子力推進派であったが、この作品には反原子力発電の萌芽が見られ、それが最後のエッセイ、『孫は瓦屋と木樵に』(二〇〇六年四月)では、人間は核との共存はできぬという認識に至った。著者は原発推進派から原発反対派への転向をなしたのである」(「再版あとがき」、『被爆博覧会』文芸社、2008年)と記している。

説は原発事故を扱いながらも、作品世界の中ですら「終わり」を描くことを断念せざるをえないのである。

そして、3.11を経て、川上弘美、古川日出男、高橋源一郎らによって新たな原発小説が書かれはじめている。これらの作品では、すでに起こってしまった原発事故の「後」に焦点が絞られていく。原発事故という出来事の「ゼロ地点」がどこにあるのか、登場人物はどのような位置から、どのような立場で、「ゼロ地点」に近付こうとしているのか。それを描くことが強く意識されている。これは従来の3.11以前の原発小説には見られなかった特徴であると言ってよい。作品が事故の「後」を描こうとすると、必然的に原発事故以前の言葉や思考が呼び込まれ、それが練り直され、改変されていくさまに読者は立ち会うことになる。3.11を経たいま、作者も、そして読者も従来の思考を問い直す必要があることをこれらの作品は示していると言えるだろう。

「終わり」のない出来事の只中で、出来事への向き合い方を思考しなければならない場所に、いま私たちは立っている。次節では、井上光晴『西海原子力発電所』を取り上げ、3.11以後の視点から原発小説の読みを開いていくことを試みる。

2. 井上光晴『西海原子力発電所』

1926年、旅順に生まれた井上光晴は早くから原発に関心を持ってきた作家であった。被爆者および原発を扱った作品には『手の家』(1960年)、『地の群れ』(1963年)、『夏の客』(1965年)、『母・一九六七年夏』(1967年)、『明日』(1982年)などがある。井上は、『手の家』や『地の群れ』で、差別を受ける者同士がお互いに対立し、差別しあうという状況を描いてきた。原発に着目し、差別の構造に目を向けてきた井上は、原発を作品の主題として選んだのは必然であったと言えるだろう。過疎に苦しむ地域に巨額の金を落として受け入れを認めさせ、建設される原発は、地域の住民を分断し、労働者を被曝させていく。井上は、そのような原発の負の側面を描くこ

とを強く意識していた。

『西海原子力発電所』はチェルノブイリ原発事故の直後に発表された。井上は、「小説『西海原子力発電所』(文藝春秋)の執筆中、チェルノブイリ原発の爆発に直面して、私は急速テーマを改変したが、今になって思えば、構想した通り、西海原子力発電所の原子炉事故によってこの上もなく汚染されて行く町や港の状況を克明に描写すればよかったのである」⁴と述べている。しかし、結果的にこのような筋立ては回避され、『西海原子力発電所』は原発の潜在的な危険や「何もかもが原発に結びつくとる町」の複雑な人間関係が描き出された。また、原発や原爆について語りうる資格を備えている人間は誰なのかという、出来事の当事者性を巡る問題にも踏み込んだ作品となった。

黒古一夫は井上が早くから原発に対する認識を備えたことを指摘し、この作品が、「(核=原発)という得体の知れない存在によって支配された不気味な世界」を描き出していることを評価した⁵。川村湊は原発が地域を疲弊させ、狂わせるという性格を持った装置であることを示した点にこの作品の重要性を見いだしている⁶。陣野俊史はこの作品の「欠落」を指摘し、井上が原発の奥底に潜む「もっと深いどろどろした怪物」の存在を示唆するに留まり、「原発の安全性と危険性を主張する言説を超えたところにある「怪物」を、井上は書くことができていない」とした上で、「逆に言えば、井上がその「怪物」の存在に気づきながらも、明確に暴き出すことができなかった事実そのものが、核を描く小説の困難を映し出しているように思える」と論じている⁷。

⁴ 井上光晴「あとがき」、『輸送』文藝春秋、1989年、202頁。

⁵ 黒古一夫『原爆文学論——核時代と想像力』彩流社、1993年、35頁。

⁶ 『西海原子力発電所』の作品世界では、原発で働く人間も、それに反対して反原発の芝居を上演する人間も、長崎での被爆を特権的にふりかざす人間も、新興宗教に入り込む人間も、それぞれ少しずつ正常心を失い、正気の外側へはみ出ていってしまう。原発とはそうした人の精神を狂わせてゆく装置なのであり、その原発の前庭のような場所で繰り上げられる人間喜劇を描こうとしたのが、この井上光晴の原発をテーマとした小説であったのだ(川村湊『原発と原爆』164頁)。

⁷ 陣野俊史『世界史の中のフクシマ』81-82頁。

これらの批評は、『西海原子力発電所』が原発をめぐる先駆的に表現したもの、表現しきれなかったものを明らかにしている。しかし、複雑な構造を有するこの作品から原発に関する部分を中心的に取り上げたことで取り残されてきた問題もあるだろう。特に、作品の終盤に1945年8月9日の浦上という原爆の「ゼロ地点」をめぐる言説の闘争が呼び込まれ、被爆者の当事者性が問題とされていることはあらためて注目すべき点である。この点については、中野和典が重要な指摘を行っている。『西海原子力発電所』について、中野は「原発をめぐる物語と原爆をめぐる物語を縫い合わせたものになっている。そして、原発を否定する言説も、原爆を否定する言説も、ともに信頼性が損なわれていることをその特徴としている」点を重視し、原発を否定する言説、原爆を否定する言説の発話者がともに信頼性を損なうことで、その言説が空洞化されるプロセスを明示している。その上で、「非被爆者による原爆表象が原爆の「真相」を歪めてしまう危険性や被爆者への共感を喚起できない限界性を持っていることを見据えつつ、それでもなおそのような表象を否定しない立ち位置を肯定している」ところにこの作品の可能性を見い出している⁸。非当事者が出来事を語ることの「限界」はどこにあるのか。そもそも出来事の当事者とは誰を指すのか。本節では「贗被爆者」という存在に着目することで、当事者性をめぐる考察を深めていきたい。それは、3.11以降の読者が置かれている状況とも深く関わるものとなるはずである。

まずは『西海原子力発電所』の概要を確認しておきたい。原発の町・波戸町で、水木品子という女性の家が放火され、品子と一人の男性が焼死体で見つかるという事件が起こる。波戸町の人々は原発の危険を言い立てていた品子の死を「自業自得」と言い、冷たい反応を示す。品子が精神病院での治療中に「西海原発で大きな事故が発生する。それで波戸

の者はみんな犬か猫みたいな顔になってしまう」としゃべったという噂は、町の人々に強い不快感をもたらしていた。

原発に勤めていた夫を自殺によって失った品子は、被爆者の劇団有明座の役者である浦上耕太郎と恋愛関係にあった。しかし、品子とともに焼死したのが耕太郎ではなく、原発で働いていた名郷という男であることが判明し、事態は混迷する。有明座の座長である浦上新五は、事件の真相を探る過程で、名郷が原発のスパイであり、耕太郎と情報をやり取りしていたことを知る。座長に問いただされた耕太郎は、座長が「贗被爆者」であることを暴露し、糾弾する。耕太郎は名郷から仕入れた情報によって、座長が8月9日に長崎にいなかったことを知ったのである。その後、耕太郎は姿をくらませる。座長は耕太郎とのいきさつと自分の偽りを座員たちに告白するが、座員の中にも「贗被爆者」がいたことがわかり、被爆者の劇団として反核の芝居を上演してきた有明座に動揺が広がる。

事件の真相は、耕太郎が以前関係を結んでいた女性、鳥居美津から届いた手紙によって明らかになる。胎内被爆者という出自に負い目を感じていた美津は耕太郎の芝居に心を打たれ、関係を結んだ。やがて美津は耕太郎の言動に疑いを抱くようになるが、疑念を打ち消して関係を続けるうち、耕太郎は水木品子に心を移した。彼女は耕太郎を思い切るために島原を訪ね、耕太郎が被爆していないことを突き止めた。品子の殺害は耕太郎の偽りと心変わりに絶望した自分による犯行だという美津の告白によって作品は幕を閉じる。

『西海原子力発電所』の冒頭で、品子は死体として登場する。品子の死をめぐるさまざまな推測が飛び交うが、死体となった品子は自らの身に降りかかった出来事について何も説明することができない。品子がどのような存在であったか、何を語ってきたかは常に他者を通して語られる。そして品子という存在は、品子を表象する言葉によって常に意味を充

⁸ 中野和典「空洞化する言説——井上光晴『西海原子力発電所』論」、『原爆文学研究10』花書院、2011年12月。

填され、テキストの中を揺れ動く。出来事の当事者でありながら、すでに喪われた、語ることでできない死者。このような死者について語るとき、浪戸町の人々は、原発に対する自らの姿勢や潜在的な不安を、はからずもさらけ出してしまう。放火事件の真相を究明する過程において、品子自身の声は他者による代弁や噂によって絶えず上書きされていく。このような品子の位置づけは、出来事の外側から、出来事を意味づけることの限界を浮かび上がらせるものとして機能している。美津が品子を殺害した動機を告白しても、なぜ品子の部屋に名郷がいたのか、二人が炎に気付かず逃げ遅れたのはなぜか、という謎は解決されないまま投げ出されている。出来事の中に残存しつづける、語り尽くすことでできない空白が、品子をめぐって呈示されているのである。

原爆の「ゼロ地点」もまた、夥しい数の死者が存在する場所であった。そして、爆心地の圧倒的な沈黙の領域に座を占め、自らの言葉で空白を充填しようとした存在が「贗被爆者」として現れる。「贗被爆者」は物語の展開に深く関わっており、特に作品の終盤で焦点化されることになる。作中に登場する「贗被爆者」は、有明座の座長である浦上新五、座員の白坂三千代、浦上耕太郎の3人である。

座長は耕太郎に糾弾され、「確かに原子爆弾の白い閃光を直接身に受けてはいない。だが、被爆者だと称しながら生きてきた年月に、ごまかしの思想もからくりもないはずだ」と自らに言い聞かせながらも、座員たちに自分の偽りを打ち明ける。

「八月九日にあたしは長崎にいなかった。浦上の地獄を見たのは三日後の八月十二日。佐世保の空廠から救援隊で派遣されたんだ。爆心地に近い兵器工場には一カ月前までいたんだけどね。……」

弁解してすむという問題じゃないが、この際みんなの許しを得たいと思います。無責任で、申し訳ないことをしでかしました。……」

頭をさげる新五に、若い座員がすぐいった。

「三日後に浦上を歩いたとなら、被爆者とおなじたい。原爆手帳を貰う資格のあるとだけんね」(176-177頁)

若い座員が口にする「原爆手帳」とは、被爆者健康手帳を指している。3日後に浦上に入った座長は、手帳を申請する資格を有していることになる。しかし、座長は「兵器工場でやられた話」を座員たちに繰り返して語っていた。その体験の捏造に対して、被爆者の座員である有家澄子は「うちは許せんよ」と激しく憤るのである。

被爆者にとって、「証言」や「証明」は重要な意味を持っている。米山リサは発話の主体が発話の行為者という面と、発話を促す言説のパラダイムに従属するという二元性によって構成されていることを指摘した上で、医学的・法的言説が被爆者の語りを点検する外的な権威として機能している例として、被爆者健康手帳の申請手続きを挙げている。

こういった二元的なプロセスが被爆者にどのように作用したかについての主要な例は、被爆者健康手帳の申請手続きに見出すことができる。生存者は、証明書を得るために八月六日から二〇日のあいだに市内のどこか特定の場所にいたことを証明できる文書を提出しなくてはならない。もしそういった文書を入手できない場合は、直接の体験談か原爆が投下されたときに申請者が市内にいたことを証明してくれる誰かの証言が必要となる。被爆者健康手帳は、「その人が原子爆弾による被爆者であることを示す一種の証明書である」と定義され、個人の原子爆弾の経験を法的に認知するのである。⁹

「被爆者」という枠組みは、爆心地から同心円状に広がる地域のどこにいたのか、いつ入市したのか

⁹ 米山リサ『広島 記憶のポリティクス』岩波書店、2005年、143頁。

によって規定されてきた。証人の不在や、僅かな時間や距離のずれによって「被爆者」として認知されず、手帳を受け取ることでできない人々も多く存在する。しかし、はるかな時間にわたって影響を及ぼす核の被害に明確な境界を設けることが困難なのは、いまさら指摘するまでもない。ともあれ、法的に「被爆者」として認知されるためには、客観性のある証明が必要とされてきた。耕太郎に大橋の兵器工場で負傷したという嘘を暴かれたとき、座長は「あたしが兵器工場にいたのを証明する人間は何人もおるとぞ」と繰り返す。証明こそが、彼が長崎の被爆者であることを証し立てるのである。

また、座長が座員に真実を打ち明ける前の場面で、『原爆前後』第29巻から、三菱重工業株式会社長崎兵器製作所で被爆した人間による手記が引用されている。そして、座長が3日後に浦上の丘に立ったとき「それとまったく変らぬ裸の人間やトマトに似た赤いカボチャを見たのだ」と記されている。座長が救援隊員として見た「浦上の地獄」と、兵器工場に勤めた体験を絡めて体験を捏造することは、原爆の「ゼロ地点」により近い場所に自らを位置づけようとする行為であった。座長は体験を語る他者の言葉を受け取り、自分が見た8月12日の浦上と重ね合わせることで、9日へと接近していったのではなかったか。しかし、他者の言葉と体験から受け取ったものを自らの体験として語りはじめた途端、「語り」は「騙り」へと変容してしまう。それに対して、澄子は「浦上でどんげんひどか人間を見たからというて、真似なんかしよつたら、何時かわけのわからんごとになってくる」と批判するのである。

座長の告白を受けて、広島市の被爆者だと自称してきた白坂三千代は、自分も「贗者」だと名乗り出る。三千代は被爆者のふりをした理由を、次のように語っている。

被爆者のふりをしたのは、有明座に入るために
そうしたのじゃないのよ。うちの人も嘔吐い
た位だから、ずっと以前なの。どういっていい

のか、電車も木も緑もない広島市の町に立つと、
ほかのことはもう考えられなくなっちゃったの
よ。……

何時の間にか、被爆者だと自分でも思い込んでしまっ
て。……思い込むっていうより、そんなふうになっ
てしまったのね。座長と同じなのよ。何もない、零
みたい運命を自分も引受けて行こうと思ったの。……
うまく説明できないんだけど、ほかのことを考えられ
なくなっ、だったら自分もそんなふう生きようと決
心しました。……うちのひと結婚する際も、そのま
まにしたのは、ずっとそんな生き方で暮らしてきた
ので、ほかの言葉がみつからなかったのよ。……
(180頁)

三千代がどのような「語り」／「騙り」を展開して
きたのかは、作中では示されていない。この告白から
読み取れるのは、三千代が「ゼロ地点」から受け取
ったものが「何もない、零みたい運命」という空白に
ほかならなかった、ということである。座長が他者の
体験を、言葉を領有したのとは対照的に、三千代は
「ほかのことはもう考えられなく」なり、ただ自分
が被爆者に「なってしまった」という自覚のみを受け
取る。その自覚は彼女のその後の人生に強い影響を
及ぼし、被爆者という以外に自己を表象する言葉を見
いだすことを許さない。出来事との距離を取りかね、
自らを指す言葉を探しあぐねて三千代という「贗被
爆者」は「ゼロ地点」の周囲を漂っている。

だが、三千代もまた、「原子爆弾の白い熱線」を直
接身に受けた澄子から厳しい言葉を受け取る。

原爆のあとで、浦上や広島市の町を歩いた人間
は何千人もおるとよ。その人たちはみんな被爆者
になろうとしたとね。……零みたい運命を引受けた
と、三千代さんは今そういうたでしよう。そういう
言葉をいうたとよ。零みたい運

命を引受けたから、それでどうなったとね。ほかの被爆者がひとりでも助かったのか、うちはそれをききたか。…… (181 頁)

澄子の発言は、8月6日、9日に広島、長崎にいた人間と、「原爆のあとで浦上や広島町を歩いた」人間とは違うという認識に支えられている。あの日、あの空間にいた人間には、「零みたい運命」を引き受けるか否かという選択肢など用意されてはいなかったという思いがそこにある。

だが、「贗被爆者」になることは、必ずしも個人の意志や選択に帰結する問題ではない。三千代は「ゼロ地点」の破壊を目に焼き付け、放射能に汚染された土地を歩いて、「贗被爆者」に「なってしまった」という感覚を抱いた。そうであるとすれば、「贗被爆者」とは、出来事が生じた「ゼロ地点」から時間的、空間的に隔たった場所であつてなお、出来事の衝撃を受け取ってしまった存在に与えられる名である。「ゼロ地点」により近い存在があることを意識しながら、出来事から受けた衝撃や傷を生きようとする人間が「贗被爆者」となる。すでに述べたように、「贗被爆者」の「語り」は、「騙り」に変容する危険をはらんでいる。だが、当事者であればその危険を免れることができるかと言えば、そうではあるまい。出来事の体験は、当事者の体験の中にある他者の体験とせめぎ合い、発話される。出来事を「語る」とき、語り手はつねにすでに、自らにかかわる他者の存在を抱え込まざるを得ないのである。その意味で、「語り」を実践することは、死者の声を領有する危険と常に隣り合わせになっている。しかし、汲み尽くすことのできない沈黙があることに思いを馳せ、出来事の「語り」と聞き取りを実践する試みの中にこそ、「希望」と呼ばれるものが浮かび上がるのではないだろうか。

おわりに

私たちもまた、「贗被爆者」となる瞬間をすでに予感してはいないだろうか。3.11という出来事と、私たちはどのように向き合い、悼み、生き直していけばよいのか。福島第1原発から放出される放射能は

人体を深く蝕み、大気と海と土におびただしい汚染をもたらしている。その事実を理解しながらも、私たちは呼吸をし、水を飲み、食物を口にするのを止めるわけにはいかない。このような状況にあって、直接の被災や「避難」を免れた人間も、もはや自分自身を3.11に起因する出来事の当事者／非当事者のどちらか一方に振り分けることが困難な状況を生き、常に不安に揺らいでいる。「被災者」にも「避難民」にも振り分けられなかったにもかかわらず傷を受け取ってしまった存在は、「贗被爆者」に限りなく近接していく。

無数の死者が自分に連なる存在や言葉とふいに重なり合う瞬間に、私たちはこれから先、幾度も会おうのではないか。死者と生者との間には、断絶ではなく、ゆるやかなつながりがある。そのようなつながりをたぐり寄せ、出来事の残響に耳を澄ますことが求められている。

「終わり」なき出来事の只中で、原発小説を読み直すことは、3.11がもたらした生々しい傷とともにいかに生きるかを模索することにつながっている。核の時代に紡ぎ出された言葉がなんらかの指標となることを願ってやまない。

※ 本稿はWINC7月例会《文学表現によって考える3.11：原爆文学と原発文学のあいだ》での発表を基に加筆修正したものである。会場では多くの方から貴重なご意見を賜った。心より感謝の意を表したい。

※ 『西海原子力発電所』の引用は井上光晴『西海原子力発電所』（文藝春秋、1986年）に拠った。

（むらかみ・ようこ 東京大学大学院博士課程）